

研究主題 「一人ひとりの学びを支える教育課程の工夫」

～多様な学校から考える個別最適な学びと協働的な学び～

宮崎支部 第5班

### 1 主題設定の理由

令和の日本型学校教育においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が重要な柱とされている。これは、すべての子どもが自分のペースや興味・関心に応じて学びを深めると同時に、他者と共に学び合う力を育むことを意味している。

しかしながら、各校の実態は、規模・地域性・児童生徒の特性・学校課題などが大きく異なり、すべての学校が同じように取り組めるわけではない。特に、生活の乱れや学習意欲の低下など、困難を抱える学校においては、学びそのものを成立させるための工夫や支援が求められている。

そこで、本研究では「一人ひとりの学びを支える教育課程の工夫」という主題を掲げ、多様な学校の状況を前提とした上で、それぞれの現場がどのように教育課程を構想・実施し、個に応じた支援と協働的な学びを保障しているのかを明らかにしようとするものである。

### 2 研究のねらい

多様な学校での「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実践例を調べて分析し、それらを共有することで、校長や教頭が教育課程をうまく管理する方法を見つけ、すべての子どもが学べるような学校組織のあり方を明らかにする

### 3 研究の概要と成果

#### (1) 研究内容

- ① 実践紹介
- ② 教頭としてのかかわりについて
- ③ 成果

#### (2) 研究の実際

【A 小学校】（14学級・全校児童約250人）

##### ① 実践紹介

人的資源の最大活用（少人数・複数指導制）：5年生の算数で、2学級の時間割を合わせ、担任2名と少人数指導担当教諭1名の計3名で習熟度別クラスに分けて授業を実施した。

##### ② 教頭としてのかかわりについて

保護者への説明：学校だよりや保護者会を通じ、学校目標や取り組みを丁寧に説明し、理解と協力を得て円滑な学校運営を実現した。

##### ③ 成果

クラスの枠を超えた交流が生まれ、多様な考

え方に触れる機会（協働的な学び）が生まれた。

【B 小学校】（15学級・全校児童約310人）

##### ① 実践紹介

- ・ 重点目標への位置づけ：「個別最適な学び」と「協働的な学び」を学校経営方針の重点目標および校内研究の柱として全職員で取り組んだ。
- ・ 校内研究での取組：4月～6月に自己評価で各自の課題を明確にし、「授業課題解決シート」を作成。6月～12月に実践・評価・改善を繰り返し、授業のブラッシュアップを図った。

授業課題解決シート		名前
<p>「……ができない」「……したいけど時間がなくてできない」                  学び方に広がりが無い。                  教師の教えやすさから脱却できない。                  めあて（問い）が教師主導で立っている。                  振り返りの時間を確保したいが、どうしても習熟の時間を優先してしまう。</p>	<p>「……するにどうすればいいか。」（問い）                  一人ひとりが学びやすい学び方（学び方のパリエーション）を増やすにはどうしたらよいか。                  子どもたちが問いをもち、主体的に学ぶようになるにはどうすればよいか。</p>	課題
<p>「……を、……すれば、できる。」                  ・授業終了の学び方をまずは3つ程度（紙面、タブレット、教師の準備物）から、児童自身が選択できるようにする。</p>	<p>「……」                  ・單元末の時間には、必ず学びの振り返りの時間を確保する。                  ・算数の「單元末の時間」は、子どもになる授業を計画し、実行する。                  ・算数で、本時の問いを子どもたちから引き出すようにする。                  ・授業の主軸は「児童」を意識し、授業者は児童の考えや活動をファシリテートすることに徹する。</p>	見直し
振り返り		

##### ② 教頭としてのかかわりについて

- ・ 授業参観と指導・支援：国語・算数の授業研究会や相互参観授業を参観し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から指導や支援を実施した。
- ・ 対話による改善：教室巡回時に授業を参観し、放課後に対話を通して改善点や効果的な指導方法を確認した。

##### ③ 成果

- ・ 授業改善の実現：指導者が課題を意識して指導することで、授業改善が図られた。
- ・ 風通しの良い職場環境：教頭が学習面でも担任と積極的に関わることでコミュニケーションが図れ、何でも相談できる風通しの良い職場環境づくりにつながった。

【C 小学校】（14学級・全校児童約270人）

##### ① 実践紹介

- ・ 主題研究「ゆうかりまつり」プロジェクトを通じた自立した学習者の育成に取り組み「個別自立した学習者の育成に取り組み、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の具現化を図った。『自立した学習者』を、目標設定力、選択・決定力、振り返り・修正力を持つ、「対話」を通して互いの学習の質を高められ

る学習者と定義した。



② 教頭としてのかかわりについて

- ・組織的活動の活性化: 教師自身が「学びを作る」ことにワクワクし、そのワクワクを児童に伝播させ、自立した学びを育成できるように、学年や教科等の組織的活動の活性化を働きかけた。
- ・フィードバック: 「ゆうかりまつり」やその他の授業を参観し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点で担任へのフィードバックを心がけた。

③ 成果

- ・意欲の向上と伝播: 算数エンタ等を通じて、算数を楽しいものとして捉え、今後の学習意欲につなげられた。上の学年の児童の意欲が下の学年へ伝播した。
- ・問題解決能力の育成: 目標設定から企画、運営、振り返りという一連の流れが、問題解決的な能力を育てることにつながった。
- ・協働的な学び: 「友達と考えた」「友達と話し合っって無事にできた」など、協働的な活動による達成感が児童の感想から確認された。

【D 小学校】（35学級・全校児童約850人）

① 実践紹介

1 指導体制づくり

- ・指導体制の整理: 「多様性への対応」を個人の研究に委ねるのではなく、県教委、市教委、主題研究、指導教諭（授業改善推進リーダー）の実践、そして個人研究の全てが日々の取り組みにつながるように図で示し、組織的な取り組みとして位置づけた。

2. めざす授業像と授業改善の手立ての検討

- ・めざす授業像: 授業改善推進リーダーである指導教諭の公開授業の児童の姿から、多様性への対応が実現された授業では、「全ての子どもが学びに熱中している」と捉えた。
- ・手立ての抽出と連動: その授業像を実現している手立てを抽出し、「ひなたの学び」や「論点整理で記述されているデジタル基盤の活用」とのつながりを明確にした。

3. 一目で分かるシートづくり

- ・シートの作成: 「学習指導の手立て」と「め

ざす姿」を、「ひなたの学び」や論点整理とのつながりを持たせた1枚のシートにまとめた。

- ・「学習の個性化」と「協働的な学び」: 「個別最適な学び」のうち、長年取り組んできた「指導の個別化」は省き、「学習の個性化」に焦点を当てた。「学習の個性化」と「協働的な学び」の軽重を球の大きさで表現した。
- ・構造の可視化: 「ひなたの学び」は、授業改善の視点としてどの段階でも必要であるため、常に回転している（グルグル回っている）イメージとした。
- ・包摂の核: 多様な子どもを包摂することが、様々な手立てや取り組みを活性化し、目指す授業の実現につながるという考えから、シートの中心に「包摂」という言葉を配置した。



② 教頭としてのかかわりについて

- ・組織的な指導体制づくりや、授業改善の視点と手立ての整理（授業像と手立ての整理、シートづくり）といった研究全体の企画・運営・推進に深く関わっていった。

③ 成果

- ・研究の「実際」を通じて「多様性への対応」を核とした組織的な授業改善の基盤が構築されたことが成果として見られる。

4 今後の課題

- ・教頭による「伴走型リーダーシップ」や対話・フィードバックのノウハウを体系化する。
- ・指導教諭等の授業から学ぶ環境をさらに整えるなど、組織的な指導体制が確実に具現化するよう、教職員の組織的学習の仕組みを再構築・強化する。
- ・「指導の個別化」と「学習の個性化」の統合に向け、教育課程の柔軟な運用を具体化する。
- ・作成した授業改善のフレームワークを、職員との意見交換を通じてより職員の声に基づいたものにブラッシュアップし、研究熱を次年度以降のさらなる授業改善へと確実につなげる。